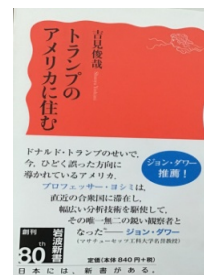


トランプのアメリカに住む



写真は社会学者・吉見俊哉著の岩波新書。帯にはジョン・ダワー・マサチューセッツ工科大学名誉教授の推薦の言葉も。「ドナルド・トランプのせいで、今、ひどく誤った方向に導かれているアメリカ」。

本書カバー裏からハーバード大学客員教授として1年間、ライシャワー日本研究所に滞在した著者が、アメリカ社会を中心近くの崖っぷちから観察した記録。非日常が日常化した異様な政権下、この国が抱える深い暗部とそれに対抗する人々の動きをリアルタイムで追う。黄昏の「アメリカの世紀」の現実とその未来について考察する

本書は雑誌『世界』で6回連載されたもので、記憶に残る論考もいくつかある。こうして新書として読み返すと、あらためて多くの知見を得ることができた。本書は次の6章と終章から構成されている。1章 ポスト真実の地政学—ロシア疑惑と虚構のメディア、2章 星条旗とスポーツの間—NFL選手の抵抗、3章 ハーバードで教える—東大が追いつけない理由、4章 性と銃のトライアングル—ワインスタイン効果とは何か、5章 反転したアメリカンドリーム—労働者階級文化のゆくえ、6章 アメリカの鏡・北朝鮮—核とソフトパワー、終章 NAFTA のメキシコに住む

紹介したいことは多いが、「はじめに」から。歴史的現象としての「トランプのアメリカ」を理解するために、本書は4つの分析的視点を重視している。第一は、ポスト真実化である。トランプ大統領の誕生がそれ自体、「フェイク」のような出来事だった。2016年の大統領選で、ロシアの諜報機関はヒラリー・クリントンの当選を阻止し、トランプ当選を促す方向で大規模なインターネットを通じた工作をしていた。ロシアからすれば、トランプが大統領になればアメリカは混乱し、その世界的覇権が後退することは予想できた。

第二は、もちろん階級の次元である。トランプ大統領は、アメリカ中西部などの「錆びついた工業地帯（ラストベルト）」の白人労働者に支えられている、南部の保守層とは異なり、これらの人々はもともと共和党支持だったわけではない、かつて、「豊かなアメリカ」を享受していた労働者は、その「アメリカ」の喪失を経験し続けてきたのである。彼らがやがて、民主党を見捨ててトランプ支持に廻ったのは、根本的に「未来」ではなく「過去」に向けての行動である。トランプ政権は、あらゆる意味で「反動」の政権であり、アメリカ社会のなかの「反動」の力学を狡猾に利用している。換言するなら、「トランプのアメリカ」を理解するには、アメリカ社会における「階級」意識の現在を問う必要がある。

この第二の次元は、ナショナリズムと人種主義という第三の次元と表裏をなす。トランプ政権は、あらゆる意味で「オバマを否定する」政権なので、結果的に人種的対立を調停どころか、むしろそれを煽るふるまいをする。このトランプの反動に対しては、スポーツから芸能までを含め、アメリカ国内の草の根的な活動から反対の声が上がってく

る。その結果、トランプは、草の根レベルで結びつくアメリカの民主主義から抵抗を受ける、まるで独裁者のような位置に立たされるのだ。

そして最後の、第四の分析次元が、性差別と暴力の次元である。アメリカは銃所持に偏執的なほど固執する社会、この固執の根底には、男性主義的な性意識があるのではないか。銃撃事件と無数のセクハラ事件には通底する基盤があるとの仮説が成り立つ。この仮説は、何が 2020 年の次期大統領選挙に向け、トランプ的なもの、その暴力と虚偽と排除に満ちたアメリカを打ち破っていくのかを考える重要な試金石になるはずだ。

(2019 年 3 月 7 日)